

滋賀の作家として 歩み続ける

今年1月、第166回直木三十五賞(以下、直木賞)の選考会が行われ、大津市在住の作家・今村翔吾さんが書いた歴史小説『塞王の楯』が受賞の栄誉に輝いた。

同作品は、織豊時代に実在した大津城などを舞台に、坂本の穴太地区を拠点としていた石工職人集団・穴太衆(あなつしゅう)が活躍する物語だ。「滋賀の作家」と自負する今村さんが直木賞作家になるまでには、どのようなストーリーがあったのだろうか。



今村さんの座右の銘である「湖上の空」を、びわここと読者のためにしたためた

「小説家になる夢を諦めている」奮い立たせられたその一言

小学5年生の時だった。古本屋で何気なく手に取った池波正太郎の『真田太平記』との出会いが、今村翔吾さんの人生を変えた。真田昌幸をはじめとする真田家の歴史をたどる長編もので、親と子、兄と弟をめぐる人間模様が迫力満点に描かれている大河小説である。全巻読破するころには、すっかり歴史小説の虜になっていた。以降、司馬遼太郎や藤沢周平などの作品

を読みあさり、歴史・時代小説の大草原へと舟を漕いでいく。

小説家を志すようになったきっかけは、中学入学を控えたタイミングで耳にした、藤沢周平の死だ。『もう今後、このストーリーの続きが読める日は来ないの……』。最初こそ気落ちしたものの、すぐに別の思いが湧き上がってくることに気が付いた。「自分が作品から受けた衝撃や熱い感情を、僕が小説家になって表現すればいいんだ」

しかしそこから十数年、今村さ

んが筆を執ることはなかった。夢は夢として封印したまま、大学卒業後には家業のダンススクールを継ぎ、教室のある滋賀県内を転々としていた。

「翔吾くんも、夢諦めてるやん」。ある時、生徒からそのように返されて、愕然とした。間もなく30歳を迎えようとしていた。このままでは40歳になっても、夢を叶えることなく同じことを繰り返しているに違いない。「夢を諦めるな」。生徒に投げかけ続けてきた言葉を、ついに自分に向けた。のちに世間

をにぎわす、小説家・今村翔吾の幕開きである。

諦めなければ、夢は叶う
ひたむきな言動が実を結ぶ

ダンスインストラクターを辞職した2015年から、日中は守山市立埋蔵文化財センターの調査員として働きつつ、夜に小説を書いている。翌年には、いくつもの短編小説賞で受賞。そのうちのある授賞式で出会った小説家・北方謙三氏の言葉に、背中を押された。「あ



1.守山市立埋蔵文化財センターで調査員を務めていた今村さん。遺跡発掘を通して、各時代の歴史の息遣いを直に感じた経験が、『塞王の楯』のなかの描写にも生きている 2.直木賞受賞者の記者会見会場まで人力車で向かった今村さんの姿は、メディアで話題になった 3.大阪府箕面市にある書店「きのしたブックセンター」のオーナーを継承。自ら店頭を立て、来店者と交流を深めることもある

すなか、2018年、平安時代の酒呑童子伝説をモチーフにした長編『童神(のちに『童の神』に改題)』が第160回直木賞候補に選ばれる。もともと「直木賞を獲得」と周囲に宣言していたこともあり、候補入りの報を受けた際には、うれしさのあまり声を上げて涙した。その後も執筆ペースを緩めず、戦国武将・松永久秀の生涯を描いた『じんかん』が第163回同賞候補に。二度の候補入りを経て、審査員の講評を参考に受賞への道を分析していった。

2021年、大津城など滋賀県内の城や砦を舞台に、石工職人・穴太衆と鉄砲職人・国友衆の因縁を描いた『塞王の楯』を発売。「人はなぜ争うのか?これまでの戦

争はどうやって始まり、どうやって終わらせてきたのか?』というテーマを表現しうるモチーフを歴史上の人物や出来事から探した結果、偶然にも地元にもスポットが当たった。執筆にあたり、かつて大津城があった浜大津の港から景色を仰いだり、穴太衆の末裔である株式会社栗田建設・代表取締役の栗田純徳さんに話を聞いた。構想を膨らませた。掘削の描写には、調査員時代の経験も込めた。まさに滋賀の作家による、滋賀を描いた快作は、2022年1月、ついに悲願の直木賞の栄誉を手にすることになる。

滋賀だからこそ住み続ける
『塞王の楯』映画化を期待!

直木賞受賞後、東京移住の誘いを多く受けるも、小説家としての地盤を固めてくれた滋賀に留まろうと決めた。「琵琶湖という自然環境と上手く共存している、適度に落ち着いていて暮らしやすいから」と、理由に地元の魅力を挙げる。

大津の歴史に触れられる『塞王の楯』をはじめ、石田三成が主人公の『八本目の槍』、滋賀県立湖南農業高等学校(草津市)をモデルにしたという『ひや

つか!全国高校生花

今村翔吾さんの新刊長編小説
絶賛発売中!



幸村を討つ 2,000円(税抜)
出版社/中央公論新社 発売日/2022年3月22日 ページ数/536ページ

直木賞受賞後、第一作!
真田幸村の真の姿に迫る歴史巨編

亡き真田昌幸とその次男幸村——何年にもわたる真田父子の企みを読み、翻弄される諸將。徳川家康、織田有楽斎、南条元忠、後藤又兵衛、伊達政宗、毛利勝永、ついには昌幸の長男信之までもが、口々に叫んだ。「幸村を討て!」と……。戦国最後の戦いを通じて描く、親子、兄弟、そして「家」をめぐる、切なくも手に汗握る物語。

今村翔吾公式ウェブサイト
<https://www.zusyu.co.jp/>
問い合わせ info@zusyu.co.jp
(株式会社豆州・今村翔吾事務所)
イベント情報
今村翔吾のまつり旅
~47都道府県まわりきるまで帰れません~
全国の書店・学校・放課後児童クラブ(学童・児童クラブ)・社会福祉施設などを、今村さん自身が専用車で回るといふこの企画。あなたのまちにも、今村さんがやって来るかもしれません。5月末ごろから出発予定です!